



社会科学研究部報

令和5年11月28日

浜松市教育研究会 社会科学研究部

令和5年度 第3回社会科研修会

10月25日(水)に、与進小学校の大橋大二郎教諭、初生小学校の大木健太郎教諭、光明小学校の木下尋之教諭が授業公開をして下さいました。それぞれの学校に分かれて、授業を見させていただき、その後に事後研修会を行うことができたのは、実に3年振りのこととなりました。

与進小学校 大橋 大二郎 教諭

1 授業公開「江戸幕府と政治の安定」

「江戸幕府と政治の安定」の単元の第1時「学習問題をつくる」場面が授業公開された。当時の世界の都市の人口ランキングから、江戸には百万人もの人がいたことを知った子供たちは授業に惹きつけられていた。

「江戸図屏風」の資料をもとにグループで当時の様子をJamboardに付箋で書いていた。「江戸図屏風」の資料は国立歴史民俗博物館のリンクを貼ることで、子供たち自身が見たい場所を拡大してより細かい所まで見られる工夫があった。グループで当時の様子を付箋に貼っていくことで、苦手な子はグループの友達の意見を参考にどの子も付箋に書くことができていた。

全体交流の場では、最初は、「荷物を運んでいる」、「訓練をしている」など、見て分かることに目がいきがちだったが、「街全体がにぎやか」、「平和だったからにぎやかだったと思う」など、街全体を見たり、予想したりする意見も出てきた。

そして、グループごとに学習問題を相談させ、ホワイトボードに書いた。各グループで出された意見から共通するキーワードを基に、一つのグループの学習問題を学級全体の学習問題とした。その後、グループで学習問題の答えを予想した。



2 研究協議

資料が非常に効果的であったという声が多かった。また、これまで振り返りを毎単元行っていたことで既習事項の積み上げが子供たちの発言から垣間見られる所もあった。一方で、Jamboardに入力することで手一杯となり、話し合いの時間が十分に確保できていなかったのが残念だったという意見も出た。

3 指導・助言 広沢小学校 澤田 強志 校長

公開授業というと、単元の後半を見せる授業が多いが、第1時に勇気をもって果敢に挑戦し

てくれた。このように、子供たちが自分たちで学習問題を作っていくことで、「自分たちの問い」となり、主体的な学びへとつながっていく。

本時の内容が盛りだくさんだったため、学習問題を予想する場面は、次時に行い、振り返りを書かせる時間を確保するとよかった。



文責：双葉小 斎藤 幸宏

初生小学校 大木 健太郎 教諭

1 授業公開「自動車をつくる工業」

「自動車をつくる工業」の単元の5時間目、研究開発に関わる人々の働きを考える授業が公開された。各グループには、「自動車の部品の1つ」とだけ伝えられた紙袋が配られ、自動車のどの部品であるのかを考える活動が設定された。子供たちは、手で触ったり、じっと観察したりして、自然と考えを交流し合う場面が生まれた。

昨年度1番購入された自動車について、自動車の最新技術と消費者の願いとの関係を調べる活動では、カタログから、自動車内の設備や技術名と、それぞれにどのような利点があるのかを探し、ノートに積極的に書き出す子供たちの姿が見られた。児童にとって、自動車が身近な題材であったことや、実際のカタログを見ることで、自動車の設備は、運転者や同乗者が望む様々な設備や技術があることに気付くことができた。



2 研究協議

子供の心を掴む資料の提示の仕方が良かったという声が多かった。また、子供たちに身近な題材であったことや授業者が、カタログの内容を精選して提示していたことが、子供たちの意欲的な活動に繋がった一方で、商品開発が消費者としての願いを受けていることは理解したものの、開発への工夫や努力とどのように関連しているかに触れるともっと良かったのではないかという意見もあった。



3 指導・助言 曳馬小学校 竹内 孝夫 校長

子供たちが意欲をもって活動するための仕掛けがたくさんあった授業だった。社会科は、誰を主語にしていくかを考えるとよい。様々な資料や題材があるが、それをいかに自分事にすることができるかが重要な教科である。「生産者の工夫や努力に迫る」を例にすると、地域の資料館に行き、1台の自動車が完成するまでの工程を追ってみるのも効果的だと思う。また、子供たちにとっての交流は、情報を共有するためのものではなく、思考させるための交流という視点をもつとよい。グループで分類させる活動も考えられる。



文責：井伊谷小 山田 航生

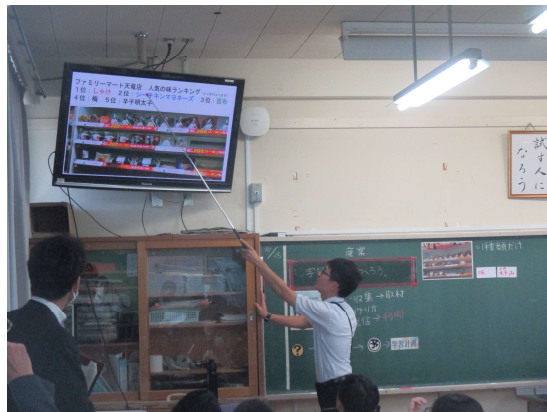
光明小学校 木下 尋之 教諭

1 授業公開「情報を生かす産業」

「コンビニエンスストアが様々な情報を収集・活用していることに気づき、学習問題を作ることができる。」が本時の目標であった。

単元で扱うコンビニエンスストアに関心をもたせるために、「もし、コンビニのおにぎりが1種類しか置けないとしたら何を店に置くか」という発問をした。児童からは、「人気」や「売り上げ」といった情報の必要性が意見として出た。さらに、「おにぎりの発注数をいくつにすべきか」と投げ掛けることで、「来客数」や「行事」といった新たな情報の必要性に気付くことができた。

これらのことから、商品の内容や発注数などは、店の立地や季節によって変えていることが分かり、店には「情報」が大事であることを知った。それらの情報の活用の仕方にも関心が行き、知りたいという意欲と共に学習問題へつなげた。



2 研究協議

大型テレビを活用した資料の提示がよかったという声が多かった。子供たちは終始興味をもって取り組むことができていた。また、子供たちの生活に身近なコンビニエンスストアを題材にしているのがよかった。事前に子供たちにとったコンビニエンスストアに関するアンケートも効果的で、子供たちの主体性を引き出す結果となった。交流では、近くの人と話す時間を多く取り入れており、たくさんの子供が発言することができていた。子供たちが、コンビニエンスストアの事例をもとに、自分事として捉えることができ、学習問題につなげることができていたなど、授業の成果が多く出された一方で、資料が多すぎたのではないかという声もあった。おにぎりの発注を考える場面では、店側の視点で考えられるように、「コンビニの店長だったら」という発問をしてもよかったのではないかという意見も挙がった。



3 指導・助言 金指小学校 山村 健一 校長 気田小学校 堀部 憲一 校長

日頃の学級づくりが素晴らしく、自分の考えを安心して発表することができていた。東京のコンビニの写真はインパクトがあった。東京のコンビニと光明学区のコンビニでは、おにぎりの販売数に違いがあることが分かる資料の提示もとてもよかったが、資料が小さかった。資料は見せたい部分を大きく提示する方がよい。時間配分もよかったが、じっくり考えさせる場面を作ってもよかったと思う。本時では、「季節」「気温」「天気」をキーワードに考えさせればよかったのではないか。多角的に考えさせるためにも、「自分がコンビニの店長だったら」という視点も有効的だったと思う。



社会科で身に付けさせたい力は何か、この単元で身に付けさせたい力は何かを、授業者はしっかり考える必要がある。1時間1時間の授業を通して子供たちの変容を意識して授業を行ってほしい。

文責：豊西小 栗田 宗典

文責：藤野 亜弥・斎藤 幸宏・山田 航生・栗田 宗典